法栄寺歳時記

２０２６年
１０月１５日
第１５８号
発行
法栄寺門徒会

報恩講（大逮夜）

十月十一日（日）午後一時より報恩講一日目大逮夜の儀が厳修されました。近隣の僧侶十一人による読経の中、焼香がありました。その後、法話が二席ありました。この日の講師は、何度かご縁を頂いている鵜川町　願照寺前住職　石畠　博道　師でした。

讃題「本願力にあいぬれば・・・煩悩の渇水へだてなし」を称えられ、参詣への謝辞を述べられ始められました。

報恩講は、親鸞聖人の御命日の法要であるが、どういう意味があるか。私達が、今日この日を迎えさせてもらったということは、どれ程不思議で有り難く素晴らしいことであるか、じっくり味わい・喜ばせて頂くご縁の日と説かれました。



如何に不思議で有り難いことかを生物学的に、詳細な数字を駆使して、至極丁寧に示され、私たちは皆、仏様から選ばれた特別な存在、どうでもいい人は一人もいないと説かれました。

そして、選ばれた景品は、この世の旅であり楽しいものにしなければならない。どうやって。

昔話の「峠の茶屋のばば」を出され、毎日泣いていた婆さんが毎日喜んで暮らせるようになったのは、周りを受けとめる心・価値観・ものの見方が変わった。南無阿弥陀仏という物差しをもって下さいと説かれました。

電車のドアが閉まるを出され、逃げる泥棒には「しめた」、追いかける警官は「しまった」になる。どんなことにも二面性がある。しまったしまったで終わるのは、もったいないと説かれました。





ご自身の体験を出され、最後は、しめたという所で人生を終えたいと語られました。

プリントを配られ、お寺には、にこにこして来ましょう。忘れてきた幸せ・喜びを思い出す場と説かれました。

その他、本山長年のテーマ・なんまんだぶつのいみ・請求書は神様領収書は阿弥陀様・お寺は人生最高の喜びを現わす場所等について説かれました。

最後に三味線の伴奏で何曲か駆け足で合唱しました。



報恩講（御満座）
開基住職一周忌

十月十二日（月）午後一時より御満座の儀が厳修されました。



引き続き、開基住職の一周忌法要が厳修されました。法要の後、当寺の住職より御礼の挨拶がありました。

その後、法話が二席ありました。講師は前日と同じく、石畠　博道　師でした。

私達は、今特別な所にいる。この世の旅。旅の終わりは突然やって来る。旅の最中は、楽しいものにしたい。色々なことを知ってる方が心が豊かになると神事としての正月にまつわる色々なしきたりを丁寧に説明されました。



プリントを配付し、クイズ形式で説かれました。



仏教は、生きてる人のためにある。浄土真宗の御本尊は、阿弥陀仏。阿弥陀の救いで、浄土へ行く。浄土真宗の念仏は、報恩感謝の念仏。浄土真宗の信心は、仏の救いを疑わなくなった心。信心を得ると、今を精いっぱい生きられる。他力本願とは、阿弥陀のはたらき。阿弥陀様は、生まれて死ぬまで常に私を守り、生かし続けている。

門徒もの知らずとは、門徒物忌み知らずで、迷信・因習にとらわれないこと。仏教でいう「生死」とは、迷いのこと。法名は、真宗門徒として生きていくために、頂く名前。年忌法要は、亡き人を縁に仏の教えを聞くため勤める。お寺のお参りは、仏法聴聞のために行われる。と説かれました。

最後は、三味線の伴奏で、数曲合唱しました。

【報恩講前日準備】十月十日（土）午前九時より、清掃、参勤者の接待準備、張り紙、志納金の入力・張り出し、おやつ・お供物の袋詰め等の作業を行いました。

【トピックス】

寄　付

一、更生保護法人　大谷染香苑へ「お米」

一、郵便局　こども食堂へ「お供物のお下がりのお菓子類」

【お磨き】九月二十七日（日）午前九時よりお彼岸の後片付けとお磨きを行いました。

